

168 ○操 ……にしき。あやおり。五色の糸で美しい模様を織り出した「文錦」「紅錦」。(『漢語林』)
……とる。手にしつかりと持つ。同訓異義で、手にもつ「執」より意味が軽い。また、あやつる(操刀)。(『大字源』)

古典文学大系本を始め写本の一部はこの語を「採」とする。この字だと「とる」「つみとる」「えらぶ」の意となる。ここではすぐ下の「刀」とのつながりから考えて「操」とする写本の一部、刊本のそれを探った。

○慎 ……つつしむ。また、つつしみ用心する。

めつたなことをしないようにする。(『大字源』)

○鉛刀…切れ味の悪い刀。役に立たない人物(愚鈍な者でも一度だけは役に立つのたとえ)をいう。なまくら刀。無用のたとえ。鈍刀。

『塩鉄論』「殊形」に「彫朽木、而礪鉛刀」の例がある。

役に立たないもののとえとして、賈誼「弔屈原賦」の「莫邪為鈍兮、鉛刀為銛」を引く。(『大字源』)

↓
補説①

補説①

○168 句目「鉛刀一割」について

鉛刀でもなお一割する力がある。よって自分の力の微なるを謙遜して言う。転じて二度と物の役に立たない